

会長の挨拶 44 ロータリー奉仕の地域性の問題—その 2—

地域性の問題と関連して、もっとも基本的かつ理論的に検討せられる問題は、ロータリーは、現代の複雑な産業社会の構造の変化に対して、そのロータリーの意味での奉仕の唱導という立場から、一体地方自治体の地域的限界だけを、その奉仕の地域的基盤として考えて十分なのであるかどうかという問題がある。このことはロータリーの拡大の理論指針として、どうしても煮詰めておかなければならないし、その議論の帰結如何によっては国際大会に定款改正の議案を提出しなければならない、ということにもなるのである。

国際奉仕の問題と地域性をどのように考えるかということである。国際奉仕の概念がロータリーの中に入ったのが第一次世界大戦の時であり、ロータリー財団の先駆的基金の設定が 1917 年のことである。この国際奉仕の分野の発見は、ただ単にロータリーの奉仕概念が拡大されたにとどまらないで、ロータリーの奉仕が、地域社会を直接の対象としながら小さな善意を積み重ねる行為が、実は、世界を一つに結ぶ契機となるという認識の発見であった。この意味において、思想の世界の問題として把握する時、ロータリー運動の地域性の問題は、職業奉仕や社会奉仕の分野の問題として一応の要件ではあるとしても、絶対的な要件足り得ないという反省を行う余地がある。尤も、現在のところ、ロータリーの世界を管理的立場で見る時、ここまで認識は進んでいないのであるが。

従って、管理的立場からすれば国際奉仕の分野は、従来のロータリーの奉仕活動の地域性の原則に対する唯一の例外を示すものと、一応考えておかなければなるまい。

(小堀憲助著『ロータリー思想の理論構造』より引用)